

# 羽島崎神社の春祭り

田 村 省 三

旧暦二月四日、串木野市羽島崎神社で行われる春祭りを「太郎太郎祭」といって、鹿児島県教育委員会は、昭和三十七年十月二十四日、「羽島崎神社春祭に伴う芸能（田打・船持祝）」として、民俗文化財（無形）に指定した。

黎明館では、県内の民俗行事や民俗芸能をフィルムに収め、映像資料として展示、保存するとともに、講座・講演会等において活用することを目的に、これらの映像化をすすめている。「太郎太郎祭」は、昭和五十七年二月に撮影され、現在「民俗行事・芸能・娯楽」のコーナーに展示されている。

「太郎太郎祭」は、すでに小野重朗氏によって詳細な報告や研究（鹿児島県文化財調査報告書 第九集「柴祭と打植祭」）が公にされ、学問的な意義づけもなされているが、撮影に同行した際のノートと今回新たに調査した聞き書き等をもとに、今日の「太郎太郎祭」の概要を報告し、若干の考察を加えてみたいと思う。

## 一、羽島崎神社

羽島は、串木野市の北西部にあたり、弁財天山の山麓に広がる戸数九六二戸、人口三六〇〇人余の半農半漁の集落である。西に羽島崎が出、

遠く南に海を隔てて野間岳を望む。羽島崎神社は、この羽島崎の中程にあつて、ピロウやアコウの自生する亜熱帯の森を背にしている。羽島は、平身、浜東、浜中、浜西、光瀬浦、光瀬上、光瀬下、海士泊、萩元上、萩元下、万福、小倉、平山、下山の一四の字に分れ、内六三〇戸余りが羽島崎神社の氏子であり、「太郎太郎祭」は羽島崎神社の春祭りとして行われる。農家では「田打ち」を漁業の家では「船持ち」の行事を行うが、海士泊は、羽島の麓にあたり、旧士族の家敷があつたところで、昔からこの祭りには参加しなかつた。羽島崎神社宮司は永く海士泊の梅北家がつとめていた（現在は、冠嶽神社宮司田代宣照氏）。羽島崎神社は鏡大明神とも言われ、天智天皇の妃大宮姫が瀬娃に下られる途中に遺された鏡を祀るといふ言い伝えも残っている。祭神その他については、鹿児島県神職会が昭和十年に編輯した『神社誌』を参照することにした。

羽島崎大明神 薩城ヨリ 十一里半 祠官 梅北加賀

祭神二座

大己貴命

天治玉命

一、當社勧請之年曆傳記不詳

九月九日 正祭

一、祭料志斗七舛 産子中出来

末 社

一、下名之内別府村 稻荷大明神 一、同所 八房大明神

一、下名之内半江村 天満天神 一、下名之内の本村 次田大明神

一、上名向原 妙見社 一、町 恵比須

一、濱 伊勢大神宮 一、上名之内 山之神

一、濱 恵比美<sup>(ウヰ)</sup> 一、下名之内 山之神

一、麓 諏方大明神 一、羽島之内 諏方大明神

一、同所 天神 一、羽島 甲大明神 祭米五斗<sup>産子</sup>

一、あら川 松の尾大明神祭米一斗三舛<sup>産子</sup> 一、諏方大明神 祭米一斗五舛<sup>産子</sup>

一、熊野権現 一、諏方大明神 祭米一斗五舛<sup>産子</sup>

神社明細帳

日置郡串木野村羽島五千九百四十四番

村社 羽 島 崎 神 社

一、神祭 大己貴命、少名彦命

一、由緒 不詳

一、社殿 式間三尺

一、境内 四畝式拾式歩 官有地

一、氏子 五百十六戸

一、管轄廳迄距離 十里

「羽島崎大明神」の項は、明和五年から六年にかけて、鹿児島稲荷神社

祠官本田親盈が編輯した資料によるものであり、「神社明細帳」は、昭

和十年当時のものである。現羽島崎神社においては、祭神を大己貴命、

少名彦命の二柱としている。

二、祭りの概要

本田親盈の編輯した資料においては正祭を九月九日とし、「神社明細帳」には祭礼の記事がみえない。少くともどちらも旧暦二月四日に行われる「太郎太郎祭」については一行も触れていない。「太郎太郎祭」という名称の由来は、田打ち行事において「太郎、太郎、牛をとってけ」という登場人物の名によるものであることはまちがいないと思われるが、羽島崎神社の春祭り全体を指してこう呼ぶのはごく最近になってからではないかと考えられる。古老の話では、「二月の祭り」という呼称が一般的であったという。

昭和五十七年の「太郎太郎祭」は、新暦二月二十七日に行われた。旧暦二月四日がちょうどこの日にあたったのである。祭りの内容は、県内の他の春祭りにも多く見られるような予祝行事であり、おめでたいことを年の始めに模擬的に行つて、その年を寿ぎ、作物の豊穰や大漁を祈るものである。ただ、羽島崎神社の春祭りが他所の行事と異なる点は、農耕に関する田打ち行事と漁業に関する船持ち行事が相前後して同じ祭りの場で行われることと、どちらも数え歳五才の男子の祝いを行うという点とであろう。祭りの概要を記してみたい。

(1) 祭礼前日

祭りの準備は、正確には船持ち側の「舟唄」の稽古が旧暦正月二日から始められるので、この日からということになるが、これについ



シイの木の伐り出し

では後に述べることとして、祭礼前日の様子から見てみることにする。また、五才の祝いの祝宴の準備については、祝宴の項で報告したい。

(田打ち)

○シイの木の伐り出し

田打ち行事は、平身、萩元上、萩元下、光瀬上、光瀬下、万福、小倉、平山、下山の農業に従事する人々が

受け持ち、田打ち行事の登場人物に扮する新屋、富永、寺師の三氏を中心に準備がすめられる。

田打ち行事に用いるシイの木をこの日に神社の裏山から伐り出しておく。これを用いて田ごしらえ用のクワをつくり、またカシキに見たてるのである。昔は、田打ち祝い(五才の祝い)をする家では、子供に持たせるクワ用の良い枝振りを確保するために、真新しい手ぬぐいをその枝に結んで目印にしたという。



注連縄づくり

○注連縄づくり

羽島崎神社の注連縄の掛け替えはこの日に行う。ワラは、田打ちの人々が秋の収穫時に準備し、十分乾燥させたものをビニール袋に入れて保存しておく。ワラは先ずワラスグリでスグって、ワラ打ち棒でたたき、太さを調節してワラ束をつくっておく。ワラ束は、神社の裏山に持って行き、二本の立木の間に横木を渡して結んだ櫓に掛けて、十五夜の綱を編む要領で縛う。縄は三人がかりで縛うが、細い部分になると「ホイ、ホイ」という掛け声に合わせきつちりとしめる。これが終ると横木から降ろし、さらに形を整え、宮司が用意した幣を付けて注連縄ができあがる。もとは、注連縄づくりは宮司の仕事であったが、今は田打ちの人々がするようになった。



牛 面

○牛の面

田打ち行事の牛役をとめる寺師氏は、前日のこの日に牛面を祠の室園家から牛の面を貸りてくる。室園家は名頭家で、本来はこの家の主人が牛役をつとめたものであったという。面の裏には、「安永十年二月四日」の銘が記されている。

この朝室園家では、牛面に神酒をかけて祭っておく。寺師氏は、室園家を訪れると面に拝礼し、牛面と衣装の入った箱を貸りて自宅に帰る。

面と衣装は、祭りが終ると寺師氏が室園家に持参する。その時、牛のふぐりとして股間にさげる黒い袋に米一升を入れて返すのが習いである。

(船持ち)

船持ちの行事の準備は、浜東、浜中、浜西、光瀬浦の漁業に従事する人々が受け持つ。

○米積み船の準備

船持ちの名のとおり、船持ちの子供たちは、拝殿の前庭を海にみたてて、クリ船やダンペイ船の模型を持って廻るのであるが、この船の補修や清掃を行う。先頭の船に米を積み、米積み船と称し、これらの船は大漁や子供の健やかな成長を祈って、船持ち祝いをする家が奉納したものであったが、現在は昔のものを使っているようである。子供二人が一艘を持つので、その数だけ出しておく。

○竹の伐り出し

船持ちの方では「舟唄」を歌う。この時両手で持って船に見たてるコサン竹を裏山から伐ってくる。笹つきのまま十二本用意する。その他、氏子たちによって神社内の清掃や、参道の幟立ての作業がすすめられる。また、祭礼の手順や最終の打合わせが社務所で行われる。

(五十八年まで社務所は、海士泊の梅北家に置かれていたが、本年より神社内に設けられた。)

(2) 祭礼当日

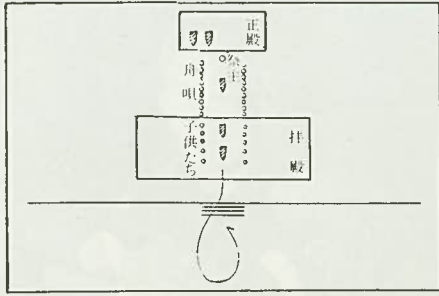
午後一時、「舟唄」を歌う人々は羽島漁協に集合し、正列して船霊様に一礼して「船唄」を歌う。この時太鼓は打たない。(太鼓は代々江石家がつとめ、列の最後部につく。)この後神社へむかう。

(祭典)

午後二時、祭典がはじまる。旧暦二月四日のこの時間が潮の満ち始める時刻で、野間岳から吹いてくる南風（ハヤカゼ）（下ノ風）に乗って神が来臨するという。また、小雨が降っていたが、不浄を流すといって吉とされる。時刻前に祭主及び神職は正殿に向って左に、総代、来賓は右に、田打ち行事代表、船持ち行事代表は中央に着座する。

祭典の次第

- 一、修 祓
- 一、御扉開き
- 一、献 饌
- 一、祭主祝詞奏上
- 一、氏子総代祈願詞奏上
- 一、玉串奉奠（昔は玉串奉奠はなかった）

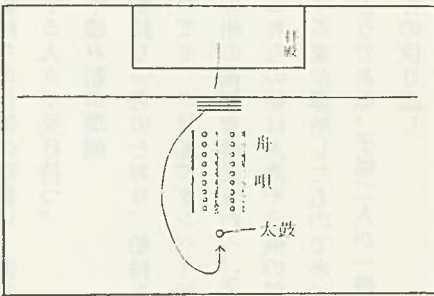


船持ち

（舟持ち行事）

元来は、田打ち行事が先で船持ち行事が後に行われたものであったが、十年程前から一年交替で順序が入れ替るようになり、昭和五十七年は、舟持ち行事が先に執り行われた。

正殿脇に船と竹十二本が用意してある。祭主は、あらかじめ正殿脇に整えられた船を舟唄連中に一艘づつ手渡しする。舟唄連中は、船を波間に漂うようにくねらせながら「ヤッスンヨーイ、ヤッスンヨーイ」の掛け声に合わせて拝殿に降ろす。拝殿に降ろされた船は子供たちに手渡される。子供たちは豆しぼりの手ぬぐいで頬を拭き、青色の襷をかけて介添役の「船持たせ人」に抱かれている。船は、二人一組で両方から抱えられて前庭に降りる。前庭



舟唄

を廻ると「トリカジ」の声で方向転換し、拜殿に戻る。「船持たせ人」は、親戚や従兄弟のしかも両親のそろっている者でなければならぬ。

子供たちの後には舟唄連中が続く。紋付の羽織に着物の裾をつぶり、その下に白い腰巻をはく。頭には豆しぼりの手ぬぐい、足は足袋はだしである。二列になって両手に笹のついた竹を持つ。拜殿の正面で一礼し、「舟唄」を歌いながら拜殿に進む。「舟唄」は十五、六分もかかるが、ゆっくりとした摺り足である。唄は、頭と下の掛け合いで歌われる。昔は頭が二人、下が十一人に太鼓が一人であったというが、今日は、頭が四人から五人、下が十五人から十六人と太鼓が一人である。また「舟唄」は、旧暦正月二日が歌いはじめで、祭りの当日までしか歌ってはならなかった。「自分たちの神様の唄だから、軽はずみに歌ってはならない。」と書かれていた。「舟唄」は、今日でも口伝えで古老が伝えている。本来は、青年たちが歌うものであったが、戦後になって祭りの姿も変わってきたようである。現在歌われるままに記しておくことにする。

#### 初詞

頭「やーらーア　めでーたアイいなーごゆあさ　めでたアイのの」

下「エイそらーわかえだもエえいさかゆ」

頭「のイ……」　下「はーもー」

#### 合詞

頭「めでたアイのの」　下「エイそらわかえだもエエイさかゆ」  
頭「のイ……」　下「はーもー」

一、頭「としのはじめのはつゆめに」　下「エイきいさらぎいやまのくすのきを　ふねにつくりていまおろす　エイしろかねはしらおしたてて　エイこかねのおせびをくくませて　てなわみなわにーこーとのいーと　あやにしきイイをほにもーちてー」

頭「あらしふくたからのしまにのりこんで」

下「エイよろづのおたからつみこんで　エイそなたのくらにおさめ　おくうれしや」

#### 合詞

頭「めでたアイのの」　下「エイそらわかえだもエエイさかゆ」

頭「のイ……」　下「はーもー」

二、頭「いせのすゞめが」

下「ならのなぎさにすをかけてなに」

頭「といても」

下「いせこいし　うれしや」

#### 合詞

頭「めでたアイのの」　下「エイそらわかえだもエエイさかゆ」

頭「のイ……」　下「はーもー」

三、頭「あさまやまから」

下「かんばらをみれば」

頭「さらしかねたる」　下「あささののののちや」

頭「ござらぬ」　下「ゆきじゃもねーうれしや」

合詞

頭「めでたアイのの」 下「エイそらわかえだもエイさかゆ」

頭「のイ……」 下「はーもー」

四頭「すみよしのまつにすずめが」 下「すをかけてさこす」

頭「すずめが」 下「すみよかろうれしや」

合詞

頭「めでたアイのの」 下「エイそらわかえだもエイさかゆ」

頭「のイ……」 下「はーもー」

五頭「ゆけどもどれどこのかわはよどのかわせのたいかわに」

下「エイにじゆはちよかわございちのまにめさしそろおてろひよう

しをさんそろえてしんとろとろとろいとおしくだる

おふなあそびをなされるに おさかさかづきやヨイこのこのこん

くだされる やまこやまさきしげるまつやまアーざんざんア

ヨイこのこのこのふな おござござござ ふねかいのエイヨウホ

ンほんほんほん どおーでどおでエーはーもー」

合詞

頭「めでたアイのの」 下「エイそらわかえだもエイさかゆ」

頭「のイ……」 下「はーもー」

六頭「ともとしもついのあいのしらいにしおいれしおまきそうて」

下「はーしよのひきづな」

頭「もろそばらいと」 下「きれもせぬかたそ」

頭「がかいの」 下「ものおもいうれしや」

合詞

頭「めでたアイのの」 下「エイそらわかえだもエイさかゆ」

頭「のイ……」 下「はーもー」

七頭「ながさきのまるやまに そんたくびにかく」

下「はなのてめぐいてにもちて ともをやぐらにおどいでて さら

ばさらばとおしまねくうれしや」

合詞

頭「めでたアイのの」 下「エイそらわかえだもエイさかゆ」

頭「のイ……」 下「はーもー」

八頭「やraithらくとおさまるに、ごじはんじよのみもないが」

下「エイきうさもなびくとぶとりも きみにしたがいたてまつる

しよこくくにくにだいまようのエイやかたをならべふねつづく

もんがいに はこまのたてどもなきように よものかぐめのため

のとぶ ひかりかがやくきんぎんのエイごこんのいろもますとか

や きぎいんじょうのたのしゆうむにエイこのごろゆかでこれま

さるうれしや

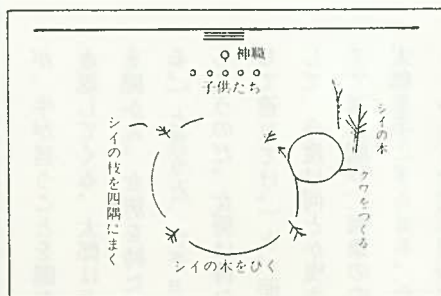
末詞

頭「めでたアイのの」 下「エイそらわかえだもエイさかゆ」

頭「のイ……」 下「はーもー」

(田打ち行事)

船唄連中が拜殿に上ると、田打ち行事がはじまる。まず子供たちが介添人と拜殿より前庭に降りて、神職の御祓いを受ける。子供たちは、船持ちの子供たちと同様、豆しぼりの手ぬぐいで頬被り



シイの木をひく

をし、青色の襷をかけている。

○田ごしらえ

子供たちが脇に下がると、「太郎太郎祭」の名の由来になった寸劇が演じられる。登場人物と配役は次のとおりであった。

テチヨ（父親） 新屋徳志氏

太郎 富永清吉氏

牛 寺師幸男氏

拝殿の前庭に太郎とテチヨが登場、前庭を田に見立てる動作をする。扮装は、二人とも蓑、笠に袴を端折って素足である。その後二人は、脇に控えていた子供たちを先導してシイの木をひいてまわる。これで田を打ち起したのだという。そして子供たちは、各自前もって選んでおいた枝で小さなクワを作ってもらう。このク



田の四方を打つ

ワは、持ち帰って大切に保存する。デコッサア（大黒様）の内神と一緒に祠つてある家もあった。次にテチヨは、シイの木の枝を伐って、田の四方に撒く。これは、カシキ（緑肥）を踏み込んだということである。さらにテチヨが、シイの木の幹で作った大きなクワで子供たちのやり残した田の四方を打つ。この間、テチヨも太郎も会話らしい会話はせず、ほぼ無言である。観衆は、田を取り囲むようにして見物しているが、舞台づくりが終わり、いよいよ午の登場と、次第に雰囲気盛り上っていく。テチヨは、田

打ちが完了したことを確認して太郎を見る。

○代かき

テチヨは、太郎に向って、「太郎、太郎、牛を取ってけ」と言う。これが最初のセリフである。太郎はふて腐れてなかなか取りに行こうとしない。しかし、とかく言いながらも太郎は鼻取り棹を持って牛を曳き出しに行く



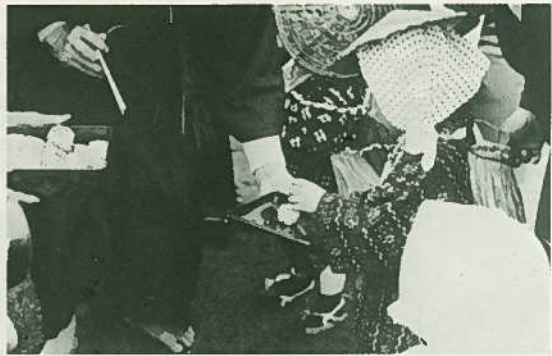
が、牛が言うことを聞かず、途中で逃げられてしまったりして引き返してくる。太郎はテチヨに「テチヨ、テチヨ、牛が言うことを聞かん。女房を持たせてもらえないから牛にまで馬鹿にされる。」と言うと、テチヨは、「牛の取り方が下手だから逃げられてしまうのだ。女房は持たせてやるから、もう一度行ってよくだまして連れてけ。」と、面白可笑しくやり返す。太郎は気を取り直して、今度は何とか曳き出してくる。ところが牛は、角を振り立てて暴れ回り、観衆の中へ入って行ったり、田の中を駆け回って太郎を手こずらせる。やっとの思いでマガ（馬鍬）を曳かせようとすると、今度は田の中にへたつてしまうという有様である。こ



牛使い



田植え



赤飯のおむすびをもらう



水口固め

○田植え  
のようにしてどうやら代かきは終わる。

牛が大騒動をして引込んだ後は、子供たちが再び登場して神前で田植えをする。テチヨと太郎は子供たちに苗（松葉）を配り、田植綱を張る。一列に並んだ子供たちは、介添役の手を借りて田植えをしてみる。

田植えが終わるとテチヨは、塗りの重箱に入れた赤飯のおむすびを子供たちに配る。田植えの終わったサノボリのしるしとも言い、昼食のトビノコであるともいう。

テチヨと太郎は、子供たちが退場すると適当な石を持ってきて地

面に置き、互いに手を取ってこの石を踏む。田の水口を固めるのである。このようにして田打ちの一連の行事は終る。

現在この行事は子供たちと、テチヨ役、太郎役、牛役の三人で行うが昔は五人であったとも伝えられる。先の水口を固める役が別に二人いたというのである。今は、どの家がどの役をということが厳格にはできなくなっているが、元は家々の役というものがあった、例えば、今テチヨをつとめる新屋さんの家は、本来太郎をつとめた家であった。昔の家と役との関係は次のようであった。

テチヨ（一人） 新村家

太郎（一人） 新屋家

牛（一人） 室園家

水口固め（二人） 中島家

この後境内では賑やかに餅が撒かれ、子供たちは舟持ちも田打ちも神矢と記念品をいただいて帰宅するのである。

### （祝宴）

羽島崎神社の「太郎太郎祭」の特徴の一つに、数え歳五才の男子の祝いをするところがある。田打ち行事にも船持ち行事にも、子供たちは豆しぼりの手ぬぐいを被り、青い襷をかけて介添人に付き添われて参加する。そして、無事にそれぞれの役を果たして帰宅すると家々では「田打祝い」「船持ち祝い」と称して盛大な宴が開かれる。

この年は、「船持ち祝い」の行われた光瀬浦の光瀬美義氏宅の様子を取材した。そのあらましを記してみたい。

### ○祝宴の準備

祝宴は、三百人余りを招待し、「タイアレ」（鯛のアラまで食べるの意）といって昔は翌日まで飲み続けるものであったというから、その膳部の準備も大がかりなものである。

材料も半年程前からその家の主人が調達に走る。いよいよ調理が始まるのは三日程前からで、近隣の婦人十数人がかりの大仕事になる。

羽島の宴の膳になくはないのがコガ焼（ハンペン）と蒲鉾で、すべて手づくりである。特にコガ焼づくりには長年の勘が必要であり、長老格がこれにあたる。

コガ焼の材料は、豆腐、魚のスリ身、卵で、これに砂糖と塩、酒を加える。

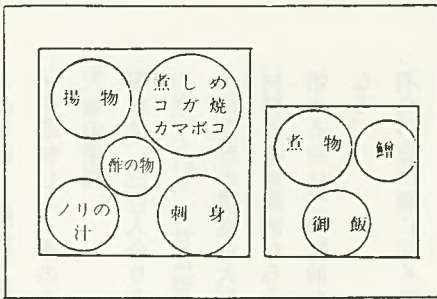
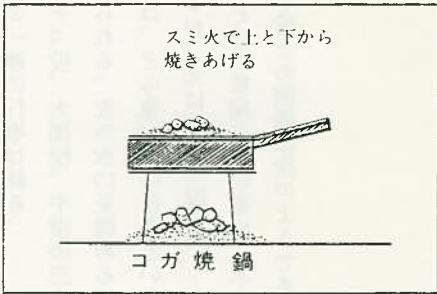
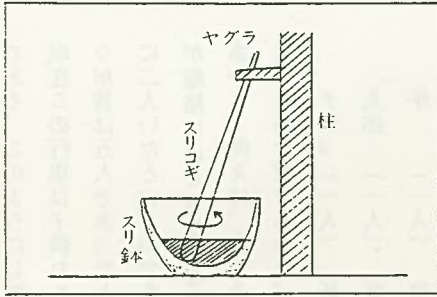
①豆腐は袋に入れて湯に浸した後、適当にしぼって余分の水気を取る。

②魚のスリ身は、豆腐や卵と混ぜヤグラを使って搗り鉢であり、調味料を加えるが、ここだけは男手を貸りる。

③こうしてスリ上ったものを四角いコガ焼鍋に移し、時々油を注ぎながらスミ火で二時間半程焼く。

このような手間をかけながら、共同作業で次々と料理ができ上がっていく。

招待状は、祝宴の前日の夜両親や親戚が手分けして配ってまわる。



祝宴の膳



船持たせ人と子供

早すぎではいけないという。  
当日は、両親とも神社に出かけるので、親戚や近隣の人々が接待の用意をする。

○祝宴

子供が帰宅すると、介添役の「船持たせ人」と子供は上座に着いて、まず「船持たせ人」が子供の両親から盃を受ける。続いて、身内の代表から両親に盃がまわり、親類縁者一同の祝福を受けて宴が始まる。

夕刻からは、招待を受けた人々が次々と訪れ、宴もたけなわになると五ツ太鼓や三味線も入って、歌に踊りにと賑やかな船持ち祝いが深夜まで続く。

このように盛大なお祝いは、今では長男に限られ、次、三男は、

ごく身内の内祝になっているようだ。いずれにしても、このような数え歳五才の祝いということが羽島崎神社の春祭りに付随しているということは、県内各所の春祭りに比べても非常に興味深いことである。

三、考 察

本稿では、この祭りの田打ち行事、船持ち行事という二つの儀礼がどうして同じ日に同じ祭りの場で行われるのかということについて考察してみたい。

(1) 「田打ち」「船持ち」行事の性格

羽島崎神社の春祭り「太郎太郎祭」は、田打ち行事と船持ち行事の大きく二つの儀礼に分けられる。「太郎太郎祭」の名称は、田打ち行事を

指すもので、川内市寄田や高江の春祭りが、打植神事のみで、「太郎太郎祭」と呼ばれていることでもわかる。打植祭りの神事は、小野重朗氏の研究で明かなように、大方が「神社の境内を田に見立てて木鋤で田打ちをし、その上を馬鋤をつけた牛を引いて回ってならし、粃種をまき、田植えを行なうこと」であり、羽島崎神社の田打ち行事も例外ではない。

一方、船持ち行事は、旧暦正月二日に「舟唄」の歌い始めをし、祭りの当日の旧暦二月四日までしか歌ってはならないという約束事を持つ。また、船が大海を渡るという模擬儀礼を行う。県内の他の漁村では正月二日に、船祝いや船乗り初め、網祝い等が行われるが、羽島ではこのような行事を行わない。しかしそのかわりに「舟唄」の歌い始めをして、これが他の地域のそれらの行事に相当するものであることは想像に難くない。

つまり、本来この二つの儀礼は別々のものであるが、羽島崎神社の春祭りの特殊性は、これらの儀礼がそれぞれ行われるのでなく、同時に行われることにある。このような祭りの形態がこの羽島にみられるのはどうしてなのだろうか。

## (2) 生活のサイクル

羽島崎神社の春祭りが特殊な形態を示しながら、長い間二つの儀礼が両立してきていて、どちらかに包含されたり、それぞれの性格が曖昧にされていないこともまた同時に興味深い。相方とも予祝行事であるから、一つの儀礼になってしまっても不思議ではないが、実際には、田打ちと田打ちの、船持ちは船持ちの領分を守り、互いに行事そのものが混合されているところは見受けられない。これは、生活基盤の差異もあろうが、

何よりもまず長い間半農半漁の村に培われた規律にあるのかも知れない。また農業と漁業の自然をとらえるサイクルの相違であると言っても良いと思う。例えば、農業に従事する地区（在）における祭りのサイクルを見てとみると、

旧暦二月四日 太郎太郎祭

旧暦六月十八日 棒踊り

旧暦九月九日 ホゼ

旧暦十一月十五日 神祭り

というように、かつては一年の間にこれら四つの神事が行われた。「太郎太郎祭」は、一年の作物の豊穰を祈る予祝行事であるが、「棒踊り」「ホゼ」「神祭り」は大略次のようなものであった。

### 棒踊り

旧暦五月は、県内に数多くみられる「御田植祭」の季節である。羽島の人々も、川内の新田神社で行われる「御田植祭」を見物したものであるという。羽島で「御田植祭」が行われたという話は聞かなかった。

棒踊りは田植えの終わった旧暦六月に行われ、昔は萩元上、萩元下、下山の青年たちが踊ったものであった。当日は、寄田と土川の境にある瀬戸野の馬頭観音に奉納してから羽島中を踊って歩いた。またアトヤマといって、「白井権八」等の芝居を演じる人々数人も踊りと一緒に回ったものだという。

### ホゼ

「神社誌」には、羽島崎神社の正祭が九月九日と記してある。ホ

ゼは、この九月九日に当るが、現在羽島崎神社の最も大きなお祭りは「太郎太郎祭」であるから、本田親盈が調査した明和年間における季節祭りの意識とはこの一事に關しても微妙な違いがあるように思う。ホゼは、放生会の転訛で、その本質は秋の収穫祭であるというが、その本質は報賽の祭である。在では稲の刈り入れの最中か終わった時期で、甘酒をつくって祝った。

—— 神祭り ——

在の人々の代表がこの日に羽島崎神社に参拝した。祭りの性格は、新嘗祭と同様である。つまり、来るべき年の豊穰を祈る冬の祭りであった。

農耕社会における季節祭りは、春、秋、冬の祭りが基本である。春には、この一年がこのようでありたいという予祝の行事が行われる。「太郎太郎祭」がこれである。小正月のケズリカケやメノモチ、ホダレヒキ等の行事と全く同じで、祈年祭の性格が濃い。秋祭りは収穫の祭りである。ホゼは、その年の収穫を感謝する秋の祭りであり、神様に収穫物を供える日、供日である九月九日に行われるとも言われる。神祭りは、鎮魂の祭りである。冬ごもりという言葉の通り、物忌みして次年への生命の復活、作物の豊穰を祈る祭りであった。

羽島の在における祭りのサイクルも作物の豊作を予祝し、それを感謝し、神様に供え物忌みして来年の豊作を祈るといふ季節祭りのくり返しであったのである。

さて、棒踊りはこのサイクルのどこに入ったものであろうか。後に入ってきた行事であると思うが、馬頭観音にまず奉納するということを考え

ても、農耕に使役する牛馬の無事息災を祈ったものではなからうか。

農耕に従事する人々のこのような感覚は、漁業に従事する人々とは自から異っていたはずである。船持ち、在に対する浜においては、大漁祝いや新造船の祝い、船霊祭り等はあるが、明らかに農耕のサイクルと同じではない。以上のように、生活のサイクルの違いが相方の儀礼を混同させずに伝えてきた一因であると思う。しかしこのように考えると、予祝行事という共通の性格を持つていても、ますます、船持ち行事は正月二日に、田打ち行事は二月四日に行ってもよいではないかということになってくるような気がする。さて、それではいつごろから田打ち、船持ちの行事は行われてきたのであろうか。

(3) 「舟唄」について

田打ち行事に使われている牛面には、安永十年の銘が入っているから、江戸時代末期には、すでに現在のような姿で行われていたであろうことが想像できる。舟持ち行事に關する限りこのような資料は残っていないのだが、奥田栄穂氏が筆写された元羽島崎神社宮司梅北氏所有の『羽島崎神社由緒記』の抜記を見ると「舟唄」が「徳川時代の初期に始まった」とある。

羽島の「舟唄」はいわゆる「御舟唄」に属すると思われる。「御舟唄」は官船新造進水の時、あるいは將軍や大名が乗船して河海を渡る時歌われたものと言われるから由緒記の記事が正しいのかも知れない。例えば、神奈川県の舟唄「やららめでたい」の歌詞

「やららめでたいな御祝、めでたの、ノーエン、それわか枝も、エ  
ン／＼さん、ノーエンこのはも。」

等のごく一般的な「舟唄」の歌詞であり、羽島の「舟唄」にも共通するものがある。また山口県阿部郡の『舟おろし歌』を見ると

〔甲〕めでたーたいーなう、エーソーレ、わーかー、(乙)えー

だーもーさーかーゆーるなう、エーはーもーエー。(甲)木更木山の桶を、舟に造つて今おろす。ハエー、白銀柱を押し立て、ハエー、黄金のせみをふくませて、みなは手縄を調へて、綾や錦の帆

を巻いて、ハエー、寶が島へ乗りこんで、数の寶を積みうけて、

ハエー、旦那の倉に納めおく。うれしいな。(甲)めでたーたいー

なう、エーソーレ、わーかー、(乙)えーだーもーさーかーゆーる

なう、エーはーもーエー。】

これも羽島の「舟唄」に近似している。同じようなものが、神奈川県中郡、熊本市等にもあるから、おそらく江戸時代初期からそれ以後の「御舟唄」系統のものであると思う。

このように実証の範囲からは、田打ち、船持ち行事とも江戸時代末期あるいは初期ごろまでは溯ることができ。しかし、これらの行事の底に流れるものは、ずっとそれ以前に源を発しているように思えてならない。作物の豊穣や大漁を祈る祭祀は、人間の生活の根本にかかるといえるからである。してみると、なぜ田打ち行事と船持ち行事が一緒に行われるかということの根本的な理由は、これら行事の性格からではなく、古形の民俗的事象をとらえることにより明確になるのではなからうか。

#### (4)「田打ち祝い」「船持ち祝い」について

羽島崎神社の春祭りのもう一つの特徴は、五才になる男子の祝いをするということである。これを単に七五三の祝いであるとみてしまつてよ

いだろうか。

小野重朗氏は、数え歳五才の男子がこの春祭りに参加することについて、

「五才の男の子の役は、祭に祝つてもらつたものではなく、むしろ純潔無垢な子供を神としてこの祭の大切な行事に参加してもらうことであつたと思う。五歳の子供を神の代理として、カシキをまき、苗を植え、舟を航海させる真似をしてもらつて、このように農業や漁業がうまく行くことを人々は祈るのである。」

と見解を示しておられる。祭りの予祝性からみても、この説は妥当であると考えられる。それは、子供たちをはじめとしてこの祭りに登場する人々の粉装がこれを裏付けるものであるからだ。

粉装をみると、子供たちも舟唄連中も太郎もテチヨも介添人も、皆豆しぼりの手ぬぐいで頭を被っている。江馬務によれば、手ぬぐいが、「中古には神仏に対して身体あるいは器具の清浄を期せんために使用されたもので……藤原時代に入つても手拭が使用されるのは主として元服と、神事その他、神聖を要とする儀礼」に用いられたという。つまり、手ぬぐいが神聖な儀礼における物忌みの具であつたことが明らかである。物忌みをするということは、こちらの魂を空にして、神霊を付着させる行為であるから、この祭りに来臨する神の威力によって一年を寿いでいたかどうかとする人々の思いが登場人物の被る手ぬぐいであらわれていることにならう。

さらに子供たちが肩に掛ける襷はどうかと言えば、やはり物忌みの具の系統に入るものだと思う<sup>6)</sup>。はち巻きにしてもそうで、例えば棒踊り等

で、はち巻きをし襷を掛けるのは、青年が物忌みをし身体に大きな力を付着させ、日常を超えたものになっていることの証である。

小野氏の説にあるように、子供たちは神の代理として祭りに登場しているのであるが、どうして五才でなければならぬかという疑問が残る。全国に「袴着」や「袴祝い」を五才で行うところが見られる。羽島における「田打ち祝い」「船持ち祝い」もこの種の通過儀礼ではないかと思う。羽島を遠く離れ、祭りに帰ってこれない人々は、五才になる我が子の着物だけを送って祝ってもらおうのだという話を聞いた。

一方、「氏子入り」を五才で行うところも多い。羽島崎神社においても、五才の子供たちにとっては、この春祭りへの参加が氏子としての最初のつとめである。

また、「船持たせ人」「介添人」という人々がいわゆる「仮親」的存在であることをみても、かつては、羽島の子供たちが五才で親方どりをしていたのではないかという想像もできる。しかし、介添人との関係について古老に聞いてみたが、最近は一時的なもので、強い結びつきは無いように思えた。それにしてもこのようなことから考えて、単純に七五三の祝いであると考えるよりも、「袴着」や「氏子入り」、「親方どり」の可能性を考える方がより説得力があるように思う。

このように古形の民俗的事象をとらえてみると、田打ち行事と船持ち行事が同じ日に同じ祭りの場で行われるのは、在も浜も数え歳五才の男子が仮親をとって氏子入りし、はじめての祭事に神の代理として参加するからであるという仮説をたてることができる。この氏子入りの行事がなければ、二つの行事がそれぞれ別々に行われても不都合はない。在も

浜も羽島崎神社の氏子たちがこぞって春祭りを祝う理由がここにあるのではなからうか。これはまた、半農半漁の羽島の人々の産土神への神仰がいかにも篤いものであったかを物語るものである。

田打ち行事、船持ち行事が、生活や祭りのサイクルを微妙に異にする在と浜の人々によって、羽島崎神社の氏子であるという共通の意識の上で今日まで伝えられているということは、このような意味からも誠に貴重である。

現在「太郎太郎祭」は、県指定民俗文化財として羽島の人々によって継承されているが、ぜひ、テチヨや太郎、牛の役や「舟唄」を若い人々に受け継いでもらいたいものである。最後に、今回の調査にご協力をいただいた羽島の方々、特に川口勇市、田代宣照、新屋徳志、丸山静雄、下水流恵吉の各氏と串木野市立図書館にお礼を申し上げたい。

(註)

- (1) 小野重朗「柴祭と打植祭」(『農耕儀礼の研究』) 弘文堂
- (2) 「羽島崎神社太郎まつり」 串木野市立図書館
- (3) 「俚謡集」 三一書房
- (4) 小野重朗「羽島崎神社太郎太郎祭」(『鹿児島県文化財調査報告書第九集』) 鹿児島県教育委員会
- (5) 江馬務「江馬務著作集 第四卷」 中央公論社
- (6) 折口信夫「はちまきの話」(『折口信夫全集 第三卷』) 中央公論社
- (7) 恩賜財団母子愛育会編「日本産育習俗資料集成」 第一法規